

6. 「薬物依存への集中内観療法

— 6ヶ月で多剤依存を形成したPTSD例 —

医療法人耕仁会 札幌太田病院

| | | | |
|------|--------|-------|-------|
| 心療内科 | ○太田 耕平 | 響 徹 | 山下 謙二 |
| 精神科 | 池田 明穂 | 太田 秀造 | 吉川 憲人 |

アルコールなど薬物依存の病理には、家族システム論やアダルトチルドレン（AC）、共依存などがあげられている。

症例：18歳 女性。嘔気、めまいなどで病院を受診し安定剤、眠剤を服用したのを契機に、その後わずか5カ月で13医療機関に25回受診した。後半には多量服薬に加え、夜間救急外来を連続受診し、ジアゼパン注射を自分から求める渴望（クレイピング）を認め、当院受診時には精神および身体依存を呈していた。

内観療法で判明したこと：『親は姉ばかりかわいがる』と寂しい気持ちでいた3歳時に姉とけんかし、果物ナイフで腕を切られた創痕が今でも残っている。それ以来、いつか姉に殺されるのでは、という不安があった。小学高学年時に、姉の起こしたトラブルからその友人による性的被害を受け、いつか姉を殺したいと憎むようになったという。

以上のことは心に秘めていた。ある日偶然にその男性と出会い、以来吐き気、めまいが出現し受診した。医療機関からもらう薬物を多量服用したり、リストカット、動悸、体の振るえなどが出現した。生活史に数多くの未解決の心的外傷による葛藤（PTSD）が明らかとなった。当院には32日間入院し、入院後7日間、さらに退院前に5日間の2回の集中内観を行い、過去のこれら未解決な葛藤の代謝や認識の再構築がなされた。

集中内観療法後に内観の印象を問うと、「ここに来てよかった。前の病院のように点滴と薬を受けていたら、すぐ同じことを繰り返したと思う。迷惑かけていたことに気付いた。親に邪魔にされている気持ちがなくなってきた」と語った。内観終了後、精神状態、病識、性格、目標設定などの著しい改善を認め、父母をまじえた家族療法により家族内葛藤の軽減と疎通の回復を相互に認め合った。父母は7日間という短日数での本人の心身の回復に感激している。なお当院では薬物は一切用いていない。

会期 平成10年12月5日(土)

 会場 法政大学市ヶ谷キャンパス 511館東
 東京都千代田区富士見2-17-1
 電話 03(3284)8436